［投稿論文：研究論文］

あるニューカマー研究者におけるアイデンティティの葛藤、そして折り合いに関する自伝的ナラティブ

Autobiographical Narrative on the Identity Conflict and Transformation of a Korean Researcher

徐 銀永
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程
Seo Eunyoung
Doctoral Program, Graduate School of Media and Governance, Keio University
Correspondence to: eunyoung@sfc.keio.ac.jp

Abstract: 本稿を通して韓国系ニューカマーである筆者は、自分が持つ複数のアイデンティティが葛藤し、折り合いをつけていく過程について考察を行った。歴史や政治、そして文化といった巨視的言説によって表象される自己と自ら認識する自己の間でアイデンティティの葛藤を経験した筆者は、個別的かつ微視的関係によるナラティブを通して自らのアイデンティティに関する問いに答えることができた。そして、その個別的で小さなナラティブを認識した際、マジョリティーとマイノリティーや日本人と移民といった二項対立的な関係が解消され、「sameness」を基とする安全で新たな空間が生まれることを確認した。最後に、筆者の経験から得た知見を通して日本における移民関連の研究に対し新しい視座の提供を試みた。

Through this article, the author, who is a Korean immigrant in Japan, examined the process of conflict and reconciliation between her multiple identities. Having experienced an identity conflict between the self which was represented by macroscopic discourses such as history, politics, and ethnic culture, and the self which was founded by herself, the author was able to answer questions about her own identity through personal and microscopic narratives. When recognizing the individual and small narratives, it was confirmed that the binary confrontational relationship between majority and minority, and between Japanese and immigrants were resolved. And a safe and new space based on “sameness” was created. Through the knowledge gained from the author’s own experience, she tried to provide a new perspective on immigration-related research in Japan.

Keywords: ナラティブアイデンティティ、アイデンティティの変容、韓国系ニューカマー、移民研究
narrative identity, identity transformation, Korean immigrant, immigration studies

1　ナラティブを始める：研究の背景と目的

まず初めに、本研究の研究対象は「私」であることを断っておく。ニューカマー[1)]という立場から日本における移民研究をしている「私」は、韓国系ニューカマー[2)]としての自分の経験を理解するのが研究における出発点になると考え、本稿を執筆するようになった。なお、以下では「私」は括弧を外して記述することにする。

私が、生まれ育った韓国を離れ日本に来たのは2003年の夏だった。日本人の夫との結婚がきっかけである。来日してから20年が経った現在、私は一人の子どもを育てながら大学院に進学し、「ニューカマー」をテーマとする研究をしている。私の研究分野に対して周りの人は口をそろえて、「それはいいわね、あなたにピッタリじゃないの！」という。または、「あなただからこそ、できる研究なのよ！」とも言ってくれる。確かに、ニューカマーによってなされるニューカマー研究は、emicの視点（内側からの視点）とeticの視点（外側からの視点）を同時に取り入れることができる面において大きなメリットがある。特に、韓国系ニューカマーに関する先行研究が少ないことを考えると、研究対象と同じ背景を持つ私だからこそ、彼らに対する深い理解や多様な観点をもって、日本における移民やその周辺をテーマとする研究に新たな知見を提示できるのではないかと考えたこともある。

しかし、研究を進めるにつれて、私は自分が韓国系ニューカマーと呼ばれることに対し、ある種の緊張と違和感を経験するようになり、それは修士課程から博士課程に進学しても解消されなかった。確かに、世間は私のような人をニューカマーと称する。そこには意見の相違など存在しない。私は間違いなく韓国系ニューカマーであり、自分の研究における対象者もニューカマーと呼ばれるグループに属している。しかしながら、世間が私をニューカマーと呼ぶ時、私が戸惑いや抵抗を感じるのも否定できない事実である。自分のアイデンティティに関するズレや矛盾する感情はどこに起因するのか。ど

のような経験から形作られ、どのように変化していくのか。私は、「ニューカマー」を研究すると決めた以上は、自分が経験している緊張や抵抗の感情を理解する必要があると考えた。Clandinin (2013) が言うように、ナラティブ探究において研究者は、自分が探究するランドスケープの一部であり、他人に対する理解は、同時に自分自身に対する理解を要求するからである。さらに、研究者がどのような立場に立ち、どのようなアイデンティティを持っているのかによって、現場と向き合う視点や姿勢はもちろん、何を明らかにしたいのかも変わる。また、研究者のアイデンティティは、研究対象者と研究者との関係性の構築にも影響を与えるのである。従って、本稿で提示する、

(1) 他者から与えられた「ニューカマー」という一般的なアイデンティティと、研究者本人が感じている主観的アイデンティティは、研究過程の中でどのように葛藤し、変容していくのか、

(2) そのプロセスには、どのような個人・社会・歴史・文化的ナラティブがかかわっているのか、

(3) (1) と (2) に関する考察から日本社会や日本における移民関連の研究に対してどのような提言をすることができるのか、

という研究問題は、上で述べた個人的経験から出発していることをまず断っておく。

2　理論的背景

2.1　日本における韓国系ニューカマー関連研究

今は移民の時代である。過去においても国際移住は決して珍しい現象ではなかったものの、現代社会の重要な争点は国際移住と関連するものが多い (Castles and Miller, 2009)。日本も例外ではなく、1980 年代から急増した移民の存在は日本社会に大きな変化をもたらした。また、移民の増加によって移民関連の研究が推し進められ、その結果、多くの蓄積がなされている。

2021 年 6 月時点で日本における韓国人人口は 41 万 6389 人で、中国人 (約 74 万人)、ベトナム人 (約 45 万人) についで 3 位を占めているものの、人口変動の推移をみると 2012 年度から年々減少傾向となっている (出入国在留管理庁、2021)。その原因として、オールドカマーの帰化や 1 世の死亡などが挙

げられるが、ニューカマーの増加が大幅な減少に歯止めをかけていると推測される（金・安本 , 2010, p.27）。また、彼らの来日した経緯は、留学や結婚、ビジネスなど多様である（生越 , 2005）。

しかし、日本における移民関連の研究は、日系南米人や中国帰国者、移住労働者などに焦点を合わせたものが多く、韓国系ニューカマーが注目の的になることは少ない（柳 , 2013；金・安本 , 2010；今里 , 2017）。韓国系を対象とした研究でもオールドカマーと呼ばれる旧移民を対象にしたものが多く（今里 , 2019）、彼らの民族アイデンティティや言語相を巨視的観点から捉えているものが多い。それゆえに、韓国系ニューカマーの日本での生活様相やアイデンティティの形成及び変容に関する実態は謎に包まれている部分が多い。韓国系ニューカマーが研究の対象からはずされてきた理由として金・安本（2010）は、日本語力の不足、不就学、低い進学率などといった移民の課題は、中国帰国者や日系南米人が主な対象とされており、韓国系ニューカマーは社会／学校側から大きな問題を抱えていないと認識されてきたことを挙げている（p.27）。また、ミドルクラス化しつつある韓国系ニューカマーの動向を分析したソン（2020）の研究も、金・安本（2010）の主張を裏付けている。しかしながら、他のニューカマーやオールドカマーと比べて遅れていたものの、近年では韓国系ニューカマーを対象とした研究においても少しずつ蓄積が成されている。そのテーマとしては、韓国系若者とヘイトスピーチに関する研究（朴 , 2015）と韓国系ニューカマーのネットワークに焦点を合わせた研究（池・櫻井 , 2010）がある。また、韓国系ニューカマーの家族や子弟に関連する研究（金・安本 , 2010；朴 , 2008；朴 , 2012；生越 , 2011）や日本の農村地域に在住する韓国人妻を対象とする研究もなされている（안 Ahan, 2011）。

韓国系ニューカマーのアイデンティティをテーマとした研究には、今里によるニューカマー 2 世のエスニックアイデンティティの規定と戦術に対する考察（2019）や日韓ダブルの「祖国留学」がエスニックアイデンティティにもたらした影響を考察したもの（2017）がある。今里の研究は、韓国系ニューカマー 2 世を対象としており、彼らの大部分は、オールドカマーと同様、日本生まれ・日本育ちである。一方、主に 1980 年代以降に来日したニューカマー 1 世は、オールドカマーやニューカマー 2 世のそれとは異なる属性を持っている。

韓国系ニューカマー１世の移住行為は、他の移民と同じくグローバル化から派生したトランスナショナルな移動として特徴づけられるが、日本における他地域からの移民に関する文脈とは異なる点が多い。周知の通り、日本と韓国は、歴史的に社会・文化・経済面において深く関わっている。例えば、1910 年から 35 年にわたって行われた日本の植民地統治は、日韓の互いに対する認識に大きく影響を与えた。日本の「植民地主義に根幹を置く対韓国意識」や韓国の「植民地時代に基づく集団的記憶」はポストコロニアル時代である現在も続いており、インターネットやマスメディア、教育、政治の言説を媒介として国民の認識に浸透しているのは否定できない。さらに、そういった植民地時代の遺産は、互いに対する認識の規範となるだけではなく、日本と韓国の両方を総体化し、その結果として日本人はこうである、また韓国人はこうであるという集団的表象を作り上げた。そして、日本に焦点を当てると、こういった植民地時代の遺産は、今も日本に生きる韓国系ニューカマー（植民地時代の影響は、韓国系だけではなく、朝鮮半島出身のすべての人に与えられているが、ここでは韓国系ニューカマーに絞ってのべることにする）のアイデンティティや生の生き方に何らかの影響を与えている。

一方、現在も現役として旺盛に活動している韓国系ニューカマー１世の多くは、本国で学童期や青年期を過ごしたため、本国での経験が彼らのアイデンティティの変容及び再構築に何らかの形で影響を与えていると考えており、そのアイデンティティとは植民地時代の集団的記憶に基づいたオールドカマー１世のそれとは異なる点が多い。多様な背景や来日目的を持ちながら、トランスナショナルな環境の中で生きている韓国系ニューカマーは、集団的民族意識から比較的に自由であり（윤 Yun, 2004）、ナショナリティやエスニシティに関連する個人のアイデンティティと日本や韓国における支配的言説との結びつきは実に複雑、また多様であると考える。

アイデンティティは、個人を取り巻く社会からの影響の下で形成されることを考えると、韓国系ニューカマーに対する理解を深めることは、長い間社会を支配していた単一民族イデオロギーから脱し、多様なエスニシティやアイデンティティを持つ人々との共存の論理を模索している日本にとって、有益な手掛かりを得る鍵となるのではないだろうか。

次節では、このような韓国系ニューカマーのアイデンティティを探究するために用いられた「ナラティブアイデンティティ」について述べる。

2.2 ナラティブアイデンティティ

「アイデンティティ」という概念を提起し、理論化したエリクソンによると、アイデンティティとは、他者と区別できる固有な特性を持続的に維持する現象であり、個々の人が属している社会との関わり、つまり経験を通して形成され、発達する (Erikson, 1956；E. エリクソン , 2011)。エリクソンがアイデンティティの概念を提起して以降、様々な学者がそれを定義し、また測定と評価を試みている。初期の研究 (例えば、Marcia (1966) と Berzonsky (1989)) は、アイデンティティを科学的に測定し、範疇的に把握する量的研究が主流であった。しかし、次第に、アイデンティティを科学主義に基づき脱文脈的に類型化するアプローチでは、個々の人が持っている個別的かつ唯一無二な側面やその形成と変容の過程と脈絡を説明できないといった見方が強まるようになる (서 · 이 Seo and Lee, 2017)。

エリクソンが言うようにアイデンティティとは心理社会的現象である。政治や文化、歴史に関する社会の支配的ナラティブと個人のナラティブは互いに深く関係しており、相互的に影響を与えあう (Hammack, 2008)。従って、人が支配的ナラティブを内面化しながら、または、それに対して反抗と妥協を繰り返しながら形成していく個々人のアイデンティティへの葛藤及び変容のプロセスと、そこから確認できる主体性を見る必要がある点において既存の量的アプローチは限界を持つと考える。

本研究で用いる「ナラティブアイデンティティ」とは、従来のパラダイムによるアイデンティティの捉え方に対する批判から浮上した概念である。ナラティブアイデンティティは、生における経験を自ら語り、意味付けをしていくことによって構成していくアイデンティティである (McAdams, 2001; McLean and Breen, 2009)。しかし、全ての語りがアイデンティティになるわけではない。生のナラティブがアイデンティティになるためには、語りの中にあらわれている過去と現在と未来がお互い有機的に、また一貫性や連続性を持って統合されなければならない。すなわち、ナラティブアイデンティテ

ィとは、自分に意味のある過去の特定の経験を選択し、再構成し、意味付けを行ったナラティブであり、再構成された過去を土台にし、現在の生を受け入れ、未来の姿に統合していくナラティブである (McAdams and McLean, 2013)。人は、ナラティブアイデンティティを構成し、それと向き合う中で、生に対する新しい理解と意味を見出し、内面化することによって変化する。そして、未来に向けて新たに歩み出すことができる。このような意味でナラティブアイデンティティは、人が自らの語りを通して構成していく主体的なアイデンティティである。また、人は、ナラティブアイデンティティを構成する際に、社会と自分の経験との因果関係を解釈し、人生に対する意味付けを行う中で、既存のスキーマを修正・再構成していく。そこから見えるのは、やはり人のエージェンシーである。

一方、上述したようにアイデンティティをナラティブとして捉えることは、ナラティブが持つ連続性や相互関連性、そしてそこからもたらされる統合性という構成的特性によって可能となる。

3　研究方法

3.1　研究手法：ナラティブ探究アプローチ

ナラティブを用いた研究には多くの分析形態と類型がある。Clandinin (2013) が言うように、ナラティブはストーリーを用いるすべてのものを指し示すようになった。その中から、本稿はナラティブ探究アプローチを用いる (Clandinin and Connelly, 2000; Clandinin, 2013)。Clandinin (2013) によると、ナラティブ探究はオートバイオグラフィやアイデンティティの研究に有効であり、特に人の経験を理解する際に一番適した方法である。

Adler (2012) は、人は経験をナラティブ化することによって、それが自分の生にとって何を意味するのかを理解することができると言う。すなわち、ナラティブを通して経験を新たに構成することによって、その時その場ではできなかった意味の創出が可能となるのである (Freeman, 2007)。また、語らなければ見過ごしてしまったことに気付かせてくれる点において自己発見やアイデンティティの再構築に繋がる (保坂 , 2014)。

ナラティブを構成する際に、人は、自分にとって意味のある経験 (living)

を選択し、再構成して語る (telling)。また、それに対する解釈と意味付けを行う (retelling)。新たに構成され、意味付けられた経験は、人の人生に変化をもたらす。そして人は、未来に向かって新たな生 (ストーリー) を生きるようなる (reliving) (Clandinin, 2013)。つまり、ナラティブとは、記憶の単純な回想ではなく、各経験を有機的に繋げていく中で全体的に統合されていくストーリーである。前掲したナラティブアイデンティティは、このような一貫性と連続性を持って統合されていくナラティブの構成的・構造的特性によって構築されるわけである。さらに、経験を連続的な現象として捉えるナラティブ探究では、ナラティブの終わりは新たな始まりを意味する。人は、ナラティブを構成していく中で経験に関する新たな気付きを発見し、意味付けを行う。そして、新しく変化した自己となって生きるようになる。すなわち、人の生に変容をもたらし、また未来への期待を生み出させてくれる (ナラティブ) アイデンティティが創出されるのである。また、その過程であらわれる人の主体性はナラティブにおける一番重要なテーマであり、そのような意味でナラティブアイデンティティとは主体的アイデンティティである (Adler, 2012)。

ナラティブ探究は、経験を関係的に探究 (relational inquiry) する。ナラティブ探究は、全ての関係 (過去と現在、未来の関係；人と人との関係；人と場所との関係；感情と事件との関係等) に注目する。さらに、ナラティブ探究は個人の経験だけに焦点を置くわけではない。個人の経験が構成され、表象される社会的・文化的・制度的ナラティブ及びそれらと個人の経験との関係も考察の対象になる。このような特徴は、ナラティブ探究を社会との関わりの中で形成・発達していくアイデンティティ (そして脈絡) を捉えるのに最適な方法論にしてくれるのである (Clandinin, 2013)。

一方、ナラティブ探究が持つ関係的側面は、ナラティブを用いた他の研究方法とナラティブ探究を区別する鍵となる。Clandinin (2013) は、ナラティブに関して考えること (about narrative) とナラティブで考えること (with narrative) を区別し、後者を取る際に、ナラティブはわれわれの人生に働きかけてくるという。ナラティブで考えることは、関係的に考えることを意味する。ナラティブを分析や考察の対象、つまり客体としてみなすのではなく、それと向き合う際に、ナラティブは、われわれの生におけるすべての関係につい

て新しく認識・洞察するようにしてくれる。そして、その関係の有り様によってわれわれの生は変わっていくのである (pp.29-31)。このことは、自伝的ナラティブを構成していく際にも重要な意味をもたらす。

3.2　私を語る : 自伝的ナラティブ

全てのナラティブは自伝的であり、オートバイオグラフィはそれ自体がナラティブ探究の基本的形態であると言われている (Freeman, 2007)。しかしながら、通常のナラティブ探究が、語り手と聞き手の存在を前提としながら 2 人の共同作業によってなされる (Pinnegar and Daynes, 2007) 反面、本稿は、私を研究対象とする自伝的ナラティブである。従って、語り手も聞き手も私である。過去における経験の主体である私と、それを語り、探究する現在の私がどのように対面し、関わりを持っていくかは、ナラティブを構成していく私のエージェンシーによる。Bruner (1995) は、オートバイオグラフィとは、「生きてきた生 (life as lived)」を単純に説き及ぶためのツールではないと言っている。彼によると、「生きてきた生」というのは存在しない。生は経験を構成、また再構成していく自伝的語りによって創造され、構成されるものである。そういった意味で、オートバイオグラフィはライフ・メイキングのための一連の手順 (procedure) である。また、彼は生とナラティブは相互に影響し合う関係であるという。ナラティブは生を、生はナラティブを模倣する。従って、私の自伝的ナラティブである本稿は私の生のミメーシスであるが、同時に私の生は本稿を模倣していく中で再構築され、未来が方向付けられる (Bruner, 1987)。

Brockmeier (1997) によると、自伝的テキストとは、ナラティブの実践及びそれに意味を与える文化的脈絡と関係しており、生はこの二つの相互作用によって形作られる。また、アデンティティは、公的・私的状況における我々の多様な自伝的ナラティブの実践を通して可変的に、また流動的に発達していくという。そういった意味で本稿は、私を取り囲む諸文脈の中で織りなされていくアイデンティティを、実質的・かつ固定的ではなく流動的・可変的なものとして捉えている。

さらに、本稿は唯一無二の存在としての私を対象とする。Freeman (2007) は、

オートバイオグラフィは自我に対する自覚ができなかった神話の時代、つまり、自分が属している共同体と自己との分離ができなかった時代には存在しなかったと言う。また、個性に対する無理解は、未だに神話的世界観が支配する社会（それが進歩した社会であっても）の特徴であるとも言っている。本稿を通して私は、科学の時代・進歩の時代に生きると同時に、神話的世界観と歴史観（単一民族イデオロギーを意味する）が持続されている社会を生きる私自身の唯一無二なアイデンティティについて語るのである。

その話を通して私は、過去における特定の文脈の中でなされた経験に関する語りが自分にどのように働きかけ、どのような影響を与えたのかを探究する。そして、自分がそのナラティブと対面した際に、それとどのような関係を形成し、また、その関係が現在の、そして未来の私をどのように変えていくのかについて語る。結論の一部をClandinin（2013）の言葉を借りていうなら、われわれが生のナラティブ（the stories we live by）を変えるなら、われわれの生を変えることができるのである。

研究対象者でありながら、研究者でもある私は、韓国の大学に留学しに来ていた日本人の男性と出会い、結婚した。2003年の夏のことである。結婚後は、日本に移住したものの、私はまだ大学院生だったため、しばらくは韓国と日本を行き来しながら学業を続け、何とか修士課程を修了することができた。そのあと子どもが生まれ、専業主婦として生きてきたが、子どもが小学校を卒業したことをきっかけに、もう一度学問の世界に戻りたいと思うようになった。2019年に日本の慶應義塾大学に入学し、二度目の修士課程を終えた。2021年には、同じ大学の博士課程に入り、現在に至る。また、研究活動と並行し、高校の非常勤講師として韓国語を教えている。

修士及び博士課程において「ニューカマー」を研究テーマとしている背景には、多様な文化や言語を背景に持つ母親として子育てをしてきた経験がある。現在、日本で生活をしているものの、韓国で生まれ育ち、教育を受けながら韓国の社会・文化・歴史的文脈の中でアイデンティティを形成してきた私が、博士論文のテーマとして「韓国系ニューカマー母親のアイデンティティの変容及び再構築」を選択したのは、自然なことかもしれない。

一方、移民の経験、もしくは移民を背景に持つ母親の経験と言っても、そ

れは一括りにできるものではなく、そこには数え切れないほど多様で複雑なナラティブが存在する。私が本研究を通して探究したいのは、研究活動をする中で社会から与えられたアイデンティティと自分が認識した自己意識が相反していることに気付くまでの過程であり、それらがぶつかり合い、格闘しながら自分のアイデンティティに関する問いに答えていく経験である。さらに、その過程を追いながら感じた社会やアカデミズムのナラティブと自分が経験した現実のナラティブとの間に存在する乖離について語りたいと考える。

3.3　データの収集及び分析

本研究では、Clandinin (2013) と Clandinin and Connelly (2000) における方法論をふまえ、研究対象者である私と私に関わる人々のナラティブを分析対象とする。具体的には、ナラティブ探究のデータとして、2018 年の 11 月から 2022 年の 7 月までの多様な公的及び私的資料を用いる。各データは次の 4 つのカテゴリーに分けられる。

・修士及び博士課程の志願書及び研究計画書、修士課程及び博士課程の講義等の一環で書いた各レポート、発表資料、修士論文
・2018 年から 2022 年までの日記、ブログ、SNS、メール
・妹や友人へのインタビュー調査
・記憶及び回想 (一部 2018 年より前に遡るものもある)

研究計画書やレポート、発表資料、修士論文を時系列的に検討することで、時間の流れによって現れる自分のアイデンティティや研究に関する視点の変化を確かめた。また、日記やブログ、SNS、メールを通して重要な出来事や経験を確認した。さらに、これらのデータを用いて自分の記憶を確認し、補完した。妹や友人へのインタビューを通して自分が気付かなかった事や知らなかった事に気付かされた。また、インタビューのデータは、日記やブログなどと同様、記憶や回想を確認・補完するためにも使用した。

さらに、上記のデータは、時間の経過と共に起きる内的変化やナラティブの中にあらわれる文脈 (社会的、文化的、歴史的ナラティブ) と自分の経験と

の関係性、及び過去における経験の主体である私とそれを探究する現在の私との関係性に準拠し解釈した。Clandinin and Connelly (2000) は、ナラティブを探究する際に、彼らが 3 次元的ナラティブ空間における 3 つの要素と称した時間性と社会性、場所性に注目する必要があると述べたが、本稿で言う時間に伴う変化は時間性に、関係性は社会性に当たる。その他、場所性が現れる部分もあり、全体的に統合的視点をもって解釈と分析をするように試みた。

4　ニューカマー研究者のアイデンティティに関する語り

＜居場所がわからない＞

お餅が食べたければ自分で作ればいいのよ。キョッポ (海外に在住する韓国人に対する呼び名) *はみんな、それくらい自分でできるって！あなたもやってみなよ！*

妹との会話の一部

あるお正月の日、韓国のお餅が食べたいと言った私に、妹は電話越しにそう言った。「お餅を家で簡単に作れる訳がない。今度里帰りしたら思いきり食べたいけど、今は我慢するしかない」と、笑いながら返したが、妹の言った「キョッポ」という言葉は、いつものように私を緊張させた。私は、自分のアイデンティティを表している「キョッポ」や「韓国系ニューカマー」という言葉を受け入れられなかった。身体は日本に来ているものの、私の心は母国の地に留まっていた。「ここでの生活は仮住まいである、いずれは国に帰る」と内心思っていた。

「ニューカマー」という言葉は、「今」、「ここ (日本)」に来ている人を意味する。身体は日本にいるものの、心は韓国に留まっている私には当てはまらない言葉であるのだ。しかし、韓国に住む韓国人から見たら、私は彼らの世界に属していない存在であるということもわかっていた。私の居場所は、日本にも韓国にもなかった。そして、私はその原因もわかっていた。それは、「在日韓国人」という私のアイデンティティである。日本に生きる韓国人として私は、韓国と日本、両国の間に挟まれた存在であり、その点に関しては他の移民と同様である。

さらに、もう一つの側面においても私は挟まれた存在であった。私は、日本には韓国に対する二つの言説が存在すると感じていた。一つ目は、植民地時代にルーツを置いた歴史や政治に関する両国の異なる立場を語る言説であり、二つ目は韓流と表象される韓国の文化に関する言説である。テレビや新聞などのメディアだけではなく、近くの本屋に並べられていた嫌韓書籍や町を走る宣伝カーから発せられた一つ目の言説の前で、私の心は萎縮し、緊張を感じた。しかし、二つ目の言説は、異なるストーリーを語る。新大久保は韓流ファンの日本人で溢れており、日本人の友人は韓国アイドルのファンになり、韓国語を勉強している。ドラマや音楽だけではなく、食べ物からファッションに至るまで、韓国の文化は、魅力的なものとして捉えられているが、それは私を表象しているわけではない。二つの全く異なる巨大な言説の間で私はすっかり戸惑ってしまった。もしかしたら、問題は、自分の「移民」という背景だけではなく、韓国人という国籍の両方（すなわち、「移民」であり「韓国人」であるという背景）だったのかもしれない。

日本に生きる韓国人として私は、母国という存在について絶えず考えざるを得ない。私は母国に多くのものを負っている。同時に、韓国人というアイデンティティは、時によっては私を傷つける。T. トドロフ（ブルガリアからフランスに亡命した文学者）は、「ブルガリアという国の運命が自分と関わりがあるような気はあまりしない」と語ったが、私は韓国という国の運命から自由になることができない。

2020 年秋学期に大学に提出したレポートの一部

＜ディアスポラ[3)]とハイブリディティ＞

2019 年の 4 月、私は慶應義塾大学の修士課程に入学した。授業初日は雨の日だった。電車で 1 時間もかけてやっと最寄りの駅に着いたが、そこからさらにバスに乗らなければならなかった。バス停には、既に長蛇の列ができており、遅刻をまぬがれるためにはタクシーに乗るしかなかった。講義室に入るには若干の勇気が必要だった。韓国で修士課程を終えてから 17 年も経った今、私はもう一度学問の世界に足を踏み入れたのである。雨空のせいで薄暗

くなっていた講義室に入った私は、一番後ろの席に座り、目立たないことを祈った。

初日の授業の内容に関してはほとんど覚えていない。それでも、一つだけ記憶に残る単語はあった。ハイブリディティ。ハイブリッドカーなら聞いたことがあるが、学問の世界ではどういう意味で使われているのか。私は家に帰ってウィキペディアで調べた。

その日以降も、講義はもちろん、参考文献の中でハイブリディティという単語は、しばしば出てきた。ハイブリディティとは、私のような人のアイデンティティを指し示していた。また、移民や多文化、ディアスポラなどは、学問の領域において大きな関心の的となっており、世界中で多くの研究がなされていることが分かった。さらに、講義や参考文献は、私のような人々のハイブリディティやディアスポラといった属性を肯定的に語っていることに驚いた。統一性や同一性を基盤とする既存の国民国家やその中で機能してきたナショナルアイデンティティは、他者、つまりマイノリティーや移民を排除する。それに対し、異質性や多様性を含んだディアスポラやハイブリディティという概念は、私のような人のアイデンティティを特徴づけており、国民国家の枠組みの中から生じる排除や疎外、差別に対抗するための戦略的概念として捉えられていた。それだけではない。移民によって持ち込まれる多文化・多言語は、本人はもちろん、出身国やホスト国にとって良いものになると語られていた。移民経験のある哲学者トドロフ (2008) は、異郷を生きる者は、最初は辛い思いをするが、最終的にはその経験から利益を引き出せるとも言った (トドロフ , 2008, p.19)。

私は、「日本と韓国における継承語の支援策」をテーマとして修士論文を書いたが、移民が持つディアスポラやハイブリディティのような特性を、レポートはもちろん、論文の中で積極的に、また、肯定的に消費した。移民が持つ多文化・多言語は、本人はもちろん、母国やホスト国にとっても貴重な資源になると唱えた一方、ホスト国やマジョリティーへの同化を強いることに対しては強く反対の意見を述べた。

しかし、だからといって「ニューカマー」と称されることに対する緊張感や拒否感が完全に消え去ったわけではない。むしろ、それに加えて、私は徐々

にアカデミズムと現実の間には一種の乖離があると感じるようになった。私のディアスポラの経験やハイブリディティ・アイデンティティは、果たして本当に良いものであるのか。異郷の地で異邦人としての人生を生きていく経験は、本当にポジティブな経験であり、将来のための資源や知恵となってくれるのか。トドロフが言った最初の辛い思いは、いつ、どのように利益に繋がるのか。現実世界を生きる私には、トドロフのように異国のアクセントが自身のエグゾティックさを増してくれたおかげで、深い教養や知識を兼備していると評価された経験がない(むしろ、その逆の体験ならある)。私の子どもは、日本にも韓国にも完全に属せない自分のアイデンティティに悩み苦しんでいる。私は、アカデミズムの文脈の中で語られるハイブリディティという概念から自分が逸脱しているような気がした。

モヤモヤする。学問と現実の世界とは、別物だろうか。移民としての私のバックグラウンドが良いものとして思われない。学問の世界で語られることは私の現実とかけ離れている。

2020 年 10 月 23 日の日記

＜救いのナラティブ＞

博士課程に進学した私が、研究テーマを「韓国系ニューカマー母親のアイデンティティの変容及び再構築」にしたのは、来日して以来、ほとんどの時間を母親として生きてきた私にとって当然の事かもしれない。しかし、自分が決めた研究テーマについて確信を持つためには、まず、自分の経験について理解する必要があると考えた。そして、自分のストーリーを探究していく空間の中で、今まで忘れていた時間と人物に出会った。それは、子育てをしながら過ごした時間であり、その時間を共に過ごした私の「日本人の友人」である。

家の近くの公園で、近所に住む知人の家で、そして子どもの幼稚園や学校で出会った彼女らは、「韓国系ニューカマー」である私を快く仲間に入れてくれた。わたしたちは、共に時間を過ごしながら子育てをした。子どもの成長について語り合い、育児情報を交換し、悩み事や新しいレシピを共有した。

彼女らは、私を「○○ちゃんママ」もしくは、「××ちゃん（私の名前）」と呼んでくれたが、そのような呼び方は、他の（日本人）友人に対する呼び方と全く同じだった。彼女らと共に過ごす空間の中なら、私の国籍も「韓国系ニューカマー」という身分も問題にならなかった。わたしたちは、皆等しく「母親」としての役割を果たす（社会的）関係で結ばれながら、共に時間と経験を共有したのである。

一方、彼女らが私に分けてくれたのは、共に過ごした時間と空間だけではなかった。彼女らは自分たちのディアスポラ性も共有してくれた。

・干したタラとキムチの匂い

Ｓさんは友人でありながら、私にとっては子育てにおけるよき相談役である。歯医者だった彼女の祖父はソウル所在の大学病院で、そして祖母は日本のキリスト教教会からの派遣でソウルのある孤児院で働いていた。戦争が終わり、彼らは日本に帰国したものの、ソウルでの経験やそこで出会った人々に関するストーリーは孫娘だったＳさんに受け継がれた。ストーリーだけではない。Ｓさんは、子どもの頃、よく祖父母の友人が韓国から訪ねてきたことや祖父が度々ソウルを訪れたことも覚えていた。

（祖父は）とても雰囲気のいい大学病院だったし、大学病院で働いているスタッフもすごくいい人ばかりだったと言ってた。毎年、クラス会があって、うんと、自分の国から来てるから、今年はソウル、今年は台北、今年は日本という感じで、ローテーションしてたのね。で、日本で同窓会を開いたりする時は、いつも私も呼んでくれたのね。（中略）
その海苔とタラ！タラって干したやつ、もうガチガチになってるやつ、それも縛ってるやつ、すごい匂いなの。（韓国からの友達は）ああいうのとか持ってきてくれて。でも、うちの祖母はそういうのを使ったりとか、祖母はキムチを何種類も作るのが上手だったのね。（ソウルに住んでいた時）近所の家でキムチを作ったりしてたから、祖母も覚えて。（中略）
（祖父は）何年に一回はソウルに、2，3年に1回はソウルに行くんだけど、行くたびにどんどん、どんどん町がもう大きくなっていて、高速道路がどんど

ん作られていて、で、街があちこち工事してて、古い家がどんどん壊されて、ま、いつもホコリっぽい感じがする時期があったっていうことを言ってたの。で、そうそう、知らないうちに新しい橋ができたりとか、道路が、あ、こんなところ道路できたんだとか、そうどんどん変わっていて、すごいって。

2022 年 3 月 30 日、S さんのナラティブ（博士論文のためのパイロット調査）

S さんは歴史を語っていたが、彼女が語る歴史は私が今まで聞いてきた歴史とは異なるものであった。しかし、S さんの語る小さな歴史のナラティブを通して、私は彼女の祖父母が生きていた時間と空間を感じることができた。干したタラやキムチの匂い、そして工事でいつもホコリがたつ町の風景。それは私にも覚えがある匂いであり、見慣れた風景であった。確かに干したタラとキムチの匂いは強烈だが、私にとっては懐かしい匂いである。そして、ソウルは未だにあちこち工事が多いからホコリも立つだろう。私の故郷は変化の速い都市であるのだ。彼女のナラティブの中で私は、S さんはもちろん、会ったこともない彼女の祖父母とも繋がったような気がした。

・人生における大きな決断

それでもあなたは人生で大きな決断を一度はできたんじゃないの。私ってそういうの、一度もやったことないから。だから、死ぬ前に一度はやってみたいの。最初はイギリスに行きたかったけど、今はアジアがいいなって。

2021 年 11 月 30 日、K さんのナラティブ（インタビュー）

K さんは、子どもが同じ幼稚園に通ったことをきっかけに親しくなった友人である。彼女は、久しぶりに会った時、私に上のように語った。彼女の言う「人生における大きな決断」とは、私の結婚のことだった。つまり、日本人と結婚し、日本に移住したことを彼女はこのように評価してくれたのである。K さんとは、幼稚園が終わった後や夏休みの間も一緒に遊ぶことが多かった。私と、イギリスに居住した経験があり、英語が得意な彼女の二人は、子育てが一段落したら海外で勉強や旅行をしながら 1 年ぐらい住んでみようと夢のようなプランを立てた。それから 10 年以上経った今も、彼女はその時

のプランを覚えていた。そして、「人生における大きな決断」として海外で住むことを実行してみたいと語ったのである。彼女の前で私のディアスポラ性は、珍しいものでもなく否定したいものでもなかった。それはある意味、憧れのものであり、人生のバケットリスト（死ぬ前までにしたいことのリスト）であった。何より、ディアスポラ性は、それが直接的なものであれ、間接的なものであれ、私だけが持つものではなかった。

「ニューカマー」である私を快く仲間に入れてくれた私の日本人の友達。彼女たちとのストーリーを探究する中で私が確認したのは、自分が彼女たちと同じであった、そして、今も同じであるということである。そして、彼女たちと過ごした時間と空間の中で私は安全だったし、安心することができたということである。私を自分たちと同じ存在として受け入れてくれた彼女たちの前で、私は自分のディアスポラ性やハイブリディティについてどのような違和感も、緊張も感じる必要がなかった。

まとめると、私が経験したアイデンティティの葛藤は、「韓国系ニューカマー」というカテゴリーに自分を位置づけた、または、位置づけられたことの結果であった。そのカテゴリーばかりに属している限り、私は日本人や韓国に住む韓国人とは異なる存在であり、彼らと私の間には揺るぎない境界線が引かれていた。また、私は挟まれた存在であった。日本と韓国、両国の歴史や政治といった巨大なナラティブの間に挟まれながら生きていた。時間性においても同じことがいえる。私は現在を生きているのに、過去の時間、すなわち植民地時代のナラティブ（特にメディアやアカデミズムによるナラティブ）から自由になることができなかった。そのことは、私を不安定にさせ、まるで自分を居場所のない人のように思わせた。「今」、「ここ（日本）」に完全に存在することができない私は、韓国系ニューカマー、つまり今、日本に来ている韓国人としての自己を受け入れられなかった。

大学で出会ったアカデミズムの語りによって、自分が持つディアスポラ性やハイブリディティについて肯定的に捉える瞬間があった。しかし、その一方で、学問と現実世界の乖離も感じた。「韓国系ニューカマー」や「移民」としてのアイデンティティは、依然として私をモヤモヤした気持ちにさせた。

そのような私を救ってくれたのは、日本人の友人と共有した時間と経験だ

った。私の記憶が新たにナラティブされることによって、その時その場では理解できなかった過去の経験の意味を見つけるようになったのである。Fanon (2013) が言うように、意味は、既に、そして、先験的にそこに存在していた。そして、その意味の土台となるのは、過去の私 (の経験) との対面から確認した日本人の友達との「同一性 (sameness)」であった。わたしたちは国籍や文化、言語を超え、同じ母親だったという経験とそれが持つ意味は、葛藤の中にいた自分のアイデンティティを安定させ、「今」、「ここ」で生きる生を受け入れさせたのである。

5　ナラティブを終える：新たな始まり

自分の経験の新たなナラティブと対面することによって私は、世の中には (日本であれ、韓国であれ) 国家や教育機関、メディアによって語られる大きな歴史、公式化された歴史、封鎖された歴史、時と場合によっては人を攻撃する歴史だけが存在するわけではないことが分かった。日本人の友達を通して確認できたのは、小さな歴史であり、個人の歴史だった。そして、異なる時間を生きる私でも彼女や彼女の祖父の経験に共感し、共有できるということを考えると、それは開かれた歴史であった。小さくてプライベートな歴史の語りに目を向けた時、私は、国籍や言語及び文化における差異、そして時間までも超えて、語り手はもちろん、ストーリーの登場人物とも繋がることを感じた。また、そのストーリーと自分を関係的に考えることによって安心感を覚えることができた。私は、日本という国について巨大な叙述を語る歴史 (過去) の中には存在しないが、個々の日本人が生きてきた歴史 (過去)、そして「現在」という時を共に生きることはできる。わたしたちの過去と現在は互いに繋がっており、共に未来に向かっていくのである。

私のディアスポラ性は、日本人の友人に受け入れられ、彼女たちのディアスポラ性は私の存在を通して引き出された。他者と私が同じ存在であること、すなわち、「同一性」を基盤とした際に、私は周りを気にせず、また躊躇することなく、「韓国系ニューカマー」にも、「移民」にも、「ディアスポラ」にもなることができる。「同一性」を基盤とした際、自分が持つディアスポラ性やハイブリディティは、有益なものになる。私に (もしかしたら他の移民にも)

必要なのは、周りのマジョリティー側と自分が同じ存在としていられる空間であった。

また私は、自分を仲間として受け入れてくれた日本人の友達の寛容さに気付かされ、更に、自分と自分を取り巻く歴史や政治、文化のナラティブについて省察できるようになった。そして、自分も寛容になることができた。トドロフが言った異郷を生きる者が得られる利益とは、寛容と省察を通して得ることができるのである。寛容な気持ちを用いて自分と周りを省察することができた時、巨大な歴史や政治、そして本質主義に基づく文化によって引かれた境界線や制約から解放され、われわれはみんな同じ人間であることを自覚することができる。そして、その自覚をもって前に進むことができる。

最後に、上記で述べた私の経験から多文化共生を目指す日本社会や移民関連の研究に対し、以下のような提言を試みる。

今はアイデンティティの時代である。白人は白人のアイデンティティを、黒人は黒人のアイデンティティを、アジア人はまたアジア人のアイデンティティを主張する。S. ホール (1998b) は本質的な黒人主体の終焉を語るが、集団的・本質的なアイデンティティの時代は未だにその力を失っていない。民族や人種、国籍など内部における同一性を前提とするアイデンティティは、それが構築される過程において「他者」の存在を必要とする。「他者」を排除し、対抗することによって内部の同一性を強化していく。しかし、そのような集団的アイデンティティは、実際には個々人の中に内在する差異を通じて絶えず交差、再交差し、まるで細胞が分裂を起こすように無数の多様な主体としてその姿をあらわしている。A. セン (2011) が指摘したように、個々の人は複数のアイデンティティを持っており、それらには固定化された上下関係など存在しない。人は、時と場合によってどのアイデンティティを表出するのかを決めるだけである。

酒井 (1994, p.9) は、「国民的同一性」と「社会関係に基づく同一性」を区別し、社会関係における同一性は同時帰属することができ、互いに排他的な関係を作らないと語った。しかし、日本のように長い間単一民族イデオロギーが力を発揮し、それなりの成果を挙げてきた国にとっては、民族や国民におけるアイデンティティ以外のアイデンティティに気付くのは難しいかもし

れない。メディアや政治、教育などから発せられる言説は、それをさらに難しくする。それでも、自分の中に潜んでいる様々なアイデンティティを見つけるのは日本人にとっても移民にとっても重要である。そして、マジョリティーである日本人と国籍やエスニシティにおけるマイノリティーである移民が同じ空間の中で社会的関係を実践する時にそれが可能になる。移民関連の研究において、日本人と移民の間の相互作用や相互依存など両方における関係性に注目する必要がここにある。移民が持つ国籍やエスニシティだけに目を向けることは、彼らをガラパゴスに閉じ込め、観察することと同じである。それを避けるためには、移民を日本人と同じ空間に位置づけ、両方が出会った際にどのような化学反応が起き、どのような結果物が出るのかを見なければならない。日本人と移民が共に存在する空間は、自分の中にある複数のアイデンティティを見つけられる空間であり、そこからさらに日本人と移民が共存できる新しい空間が出来上がる可能性があるからである。

再び私の経験に戻ると、日本人の友人と同じ空間の中で共に（母親として）成長した経験を通して確認できた母親というアイデンティティは、国籍や民族といった準拠から私を切り離し、母親同士という社会的関係で結ばれた同一性に目を向けるようにしてくれた。同時に、彼女らにも私と同じようにディアスポラ性が存在することに気付かせてくれた。その同一性の中で私は、韓国系ニューカマーにも、移民にも、キョッポにもなれるわけであるが、今度は、それらのアイデンティティを人から押し付けられたからではなく、自ら進んで受け入れることができたのである。私は、自分が持つすべてのアイデンティティを受け入れながら「今」、「ここ」に存在する。そして、未来に向かっていく。

ところで、私や私の子どもって、本当に「キョッポ」なの？当たり前のことかもしれないけど、不思議に思うこともある。だから、たまに自問するのよ。私の子どもが本当に「キョッポ」なのかって。

2022 年 4 月、韓国の友人との会話

久々に会った韓国の友人（彼女の子どもも、私の子どもと幼稚園の同級生

である）は、都内のあるカフェでコーヒーを飲みながらそう語った。アイデンティティについて悩んでいたのは私だけではなかった。彼女もまた悩んでいたのである。自分の子どものアイデンティティについて、そして、自分のアイデンティティについて。私は、ここでまた「同一性」を確認し、安堵感を覚えた。私が感じた緊張と葛藤は、私だけのものではなかった。

S. ホールは、アイデンティティとは「あるもの」ではなく、「なるもの」であり、そのプロセスの中で歴史や文化、政治の言説がいかに作用し、またそれらをいかに利用するのかが問題であると語った（S. ホール , 1998a, p.93）。私は、ニューカマーを研究する「ニューカマー研究者」になりつつある。しかし、その根底には、ニューカマー、すなわち異質的存在としての経験だけではなく、周りの日本人と同じ存在としての経験もある。これから私が出るフィールドには、日本に生きる移民の経験だけではなく、彼らと共に生きる日本人の姿もある。そして、そこに潜んでいる様々な意味との出会いを通して、移民や移民と共に移動の時代を生きる日本社会に関する新しい理解や知見が得られると考える。

注

1) 1970 年代以降、多様な経緯をもって来日した外国人をニューカマーと称し、オールドカマーと区別した三浦（2019）の定義を借用する。また、来日経緯を直接・間接的に植民地時代に置く人やその子孫をオールドカマーと称することにする。
2) 本稿では、1980 年代以降、留学や就業、ビジネスなどを目的として来日した韓国人を韓国系ニューカマーとした윤 Yun（2011）を借用することにする。
3) ディアスポラは、元々ユダヤ人やアルメニア人の歴史的離散を指す用語であるが、1980 年代後半から移民として散在するエスニック集団や難民などを説明する概念として注目されている（大井 , 2006）。ディアスポラが持つ特徴には、離散、拡張された母国、集団的記憶と献身、帰国運動、他の集団との区別、ホスト国に対する期待などがある（Cohen, 2017）。

引用文献

今里基（2017）「ニューカマーの日韓ダブルの祖国留学から見るエスニックアイデンティティの考察―オールドカマーとの比較から」『Core Ethics』13, pp.25-36.
今里基（2019）「帰属するエスニシティを徹底化しない戦術の考察―日本在住韓国系ニューカマー第二世代の事例から」『立命館人間科学研究』38, pp.15-29.
エリクソン , E. H.　西平直訳（2011）『アイデンティティとライフサイクル』誠信書店 .

大井由紀 (2006)「トランスナショナリズムにおける移民と国家」『社会学評論』51 (1) , pp.143-156.
生越直樹 (2005)「在日コリアンの言語使用意識とその変化」真田信治 他 2 (編)『在日コリアンの言語相』和泉書院 ., pp.11-52.
生越直樹 (2011)「在日コリアンにおけるニューカマーの子供たちの言語使用」『일본연구 (日本研究)』50, pp.123-139.
金花芬、安本博司 (2010)「コリアン系ニューカマーの教育戦略―韓国人と朝鮮族の学校選択と家庭内言語使用を中心に」『人間社会学研究集録』6, pp.27-49.
酒井直樹 (1994)「死産される日本語・日本人―日本語という統一体の政策をめぐる (反) 歴史的考察」『思想』845, pp.5-56.
セン , A.　東郷えりか訳 (2011)『アイデンティティと暴力：運命は幻想である』勁草書房 .
ソン・ウォンソク (2020)「韓国人ニューカマー―ミドルクラスの移動と定着」小林真生 (編)『変容する移民コミュニティ』明石書店 ., pp.136-145.
池垠璟、櫻井武 (2010)「日本における韓国人ニューカマーの情報ネットワークの変容－FGI と MAXQDA を用いた分析を通して」『東京都市大学環境情報学部情報メディアセンタージャーナル』11, pp.149-156.
トドロフ , T.　小野潮訳 (2008)『異郷を生きる者』法政大学出版局 .
朴貞玉 (2008)「日本における韓国人父母の言語教育観―父母の日本滞在歴と子どもの教育レベルを中心に」『人間文化創成科学論叢』11, pp.79-87.
朴貞玉 (2012)「日本におけるニューカマー韓国人の母親の抱える問題」『일본연구 (日本研究)』52, pp.5-25.
朴彗原 (2015)「韓国人ニューカマー若者にとってのヘイトスピーチ」『相関社会科学』25, pp.43-48.
保坂裕子 (2014)「ナラティブ研究の可能性を探るための一考察」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告書』16, pp.1-10.
ホール , S. (1998a)「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想』26 (4) , pp.90-103.
ホール , S. (1998b)「ニュー・エスニシティズ」『現代思想』26 (4) , pp.80-89.
三浦綾希子 (2019)「ニューカマー (加速する日本社会の多文化化)」額賀美紗子他 2 (編)『移民から教育を考える』ナカニシヤ出版 ., pp.33-45.
柳蓮淑 (2013)『韓国人女性の国際移動とジェンダー』明石書店 .

Adler, J. (2012) “Living into the story: Agency and Coherence in a Longitudinal Story of Narrative Identity Development and Mental Health over the Course of Psychotherapy”, *Journal of Personality and Social Psychology*. 102(2), pp.367-389.
Berzonsky, M. D. (1989) “Identity style: Conceptualization and measurement”, *Journal of Adolescent Research*. 4, pp.268-282.
Brockmeier (1997) “Autobiography, Narrative, and the Freudian Concept of Life History”, *Philosophy, Psychiatry, & Psychology*. 4(3), pp.175-199.
Bruner, J. (1987) “Life as Narrative”, *Social Research*. 54(1), pp.1-22.
Bruner, J. (1995) “The Autobiographical Process”, *Current Sociology*. 43(2), pp.161-177.
Castles, S., Miller, M. (2009) *The age of migration*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
Clandinin, J. (2013) *Engaging in Narrative Inquiry*, New York: Routledge.
Clandinin, J., and Connelly, M. (2000) *Narrative inquiry: Experience and story in qualitative research*, San Francisco: Jossy-Bass Publishers.
Cohen, R.　유 영민訳 (2017)『글로벌 디아스포라 : 경계를 넘나드는 사람들의 역사와

문화 = Global diasporas : an introduction』민속원 .
Erikson, E. (1956) “The problem of identity”, *Journal of American Psychoanalytic Association*. 4(2), pp.56-121.
Fanon, F.　이석호訳 (2013)『검은피부 , 하얀가면 』인간사랑 .
Freeman, M. (2007) “Autobiographical Understanding and Narrative Inquiry” In Clandinin, J.(ed.), *Handbook of narrative inquiry: Mapping a methodology*, London: Thousand Oaks.
Hammack, P. (2008) “Narrative and the cultural psychology of identity”, *Personality and Social Psychology Review*. 12(3), pp.222-247.
Marcia, J.E. (1966) “Development and validation of ego identity status”, *Journal of Personality and Social Psychology*. 3, pp.551-558.
McAdams, D. P. (2001) “The Psychology of Life Stories”, *Review of General Psychology*. 5(2), pp.100-122.
McAdams, D. P., and McLean, K.C. (2013) “Narrative Identity”, *Current Directions in Psychological Science*. 22(3), pp.233-238.
McLean, K. C., and Breen, A.V. (2009) “Process and content of narrative identity development in adolescence. Gender and well-being”, *Developmental Psychology*. 45, pp.702-710.
Pinnegar, S., and Daynes, G. (2007) “Locating narrative inquiry historically” In Clandinin, J.(ed.), *Handbook of narrative inquiry: Mapping a methodology*, London: Thousand Oaks.

서근원 , 이미종 (2017)「질적연구로의 질적전환 : 내러티브 정체성 연구를 사례로 」『교육인류학연구』20 (4) ,pp.1-48. (Seo Keunwon, and Lee Mijong「Qualitative Transition to Qualitative Research」)
안태윤 (2011)「일본야마가타현으로 결혼이주한 한국여성들」『재외한인연구』24, pp.36-76. (Ahn Taeyoon「Korean Migrant Bridges in Yamagata Prefecture of Japan」)
윤인진 (2004)『코리안디아스포라』고려대학출판 . (Yun Injin『Korean Diaspora』)
윤인진 (2011)『재외한인연구의 동향과 과제』북코리아 . (Yun Injin『Trends and Future Tasks of Studies of Koreans Aboard』)
出入国在留管理庁 (2021)「令和 3 年 6 月末現在における在留外国人数について」https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00017.html (2022 年 10 月 15 日アクセス)

〔受付日　2022. 11. 29〕
〔採録日　2023.　9.　9〕